自主事業

**自主事業は、ベネッセこども基金が企画・実施し、
子どもたちを支援する事業です。志を同じくする方々と共に、
4つのテーマに取り組んでいます。**

- よりよい社会づくりにつながる学び支援
- 子どもの安心・安全を守る活動
- 病気・障がいを抱える子どもの学び支援
- 経済的困難を抱える子どもの学び支援

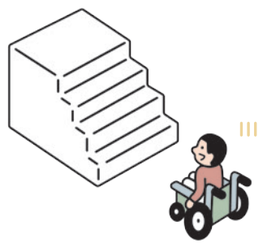
よりよい社会づくりにつながる学び支援

Pick Up

中高生による当事者研究と障がいの社会モデルの推進

現状と課題

障がいの社会モデル（社会的障壁を取り除くのは社会の責務とする考え方）が浸透していない。



医学モデルの考え方
「歩けない」ことが障がい
＝障がいは本人の体の中にある

社会モデルの考え方
「階段しかない」ことが障がい
＝障がいはアンフェアな
社会環境の中にある

今までは、医学モデルばかりが注目され、社会に合わせるために個人が努力することが多くありました。これからは、社会側を変えることで障がいがあってもなくても社会参加できる環境づくりが必要です。

取り組み

「ベネッセこども基金D&I賞」を設置し、中高生の当事者研究を支援

ベネッセこども基金D&I賞は、マイノリティな環境や状況に置かれている中高生が自分にとっての理想を実現したり、課題を解決したりする方法について探究する「自分研究」の活動に対して、研究費とメンタリングで応援するプログラムです。当事者研究の第一人者である東京大学　先端科学技術研究センター当事者研究分野　熊谷晋一郎先生をはじめ、研究者の先生にメンターとして半年間研究プロセスをサポートしていただきました。当事者による発信や研究により、「社会モデル」の推進を目指します。（株式会社リバネスとの共同事業です。）

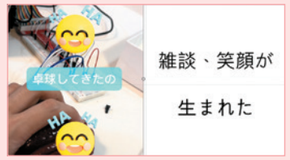
ベネッセこども基金D&I賞 研究対象分野

自分自身の特性やマイノリティ性に着目したあらゆる開発や研究

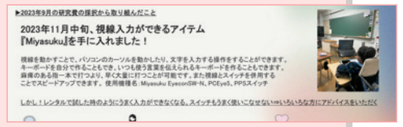
採択された研究テーマ

1. トリコチロマニア（抜毛症）に対して当事者と社会はどのように関わっていくべきか
岩手県立盛岡第一高等学校2年　井筒彩花さん
2. 肢体不自由での通常級におけるコミュニケーションの工夫
神奈川県川崎市立中学校2年　Iwakata Yurikaさん
3. Kさんの為の雑談ツールの開発
～全ての人にストレスない雑談を～
岡山県立岡山操山高等学校1年　藤原咲歩さん

トリコチロマニア（抜毛症）に対して社会はどのように関わっていくべきか



Kさんの為の雑談ツールの開発



肢体不自由での通常級におけるコミュニケーションの工夫

研究発表をご覧になった方からの声

- こんな社会を作りたいという思いを描きながら研究を行っている姿を目の当たりにし、大きな勇気を受け取ったとともに、心を動かされました（イベント中何度も涙があふれました）。
- 中高生の、課題に取り組む姿勢や行動力に、未来を変える力を感じました。
- 障がい者だけでなく、関わる人も当事者の1人なんだという考え方に感動しました。
- 子どもを教え導くという形ではなく、子どもたち自身の気づきとなるよう、まさに『伴走』としてのこの取り組みがとてもよかったです。

当事者研究の可能性と未来の学びの形

東京大学
先端科学技術研究センター教授
熊谷晋一郎先生

東京大学先端科学技術研究センター教授、小児科医。専門は小児科学、当事者研究。
今回の研究で半年間研究プロセスをサポート頂きました。

中高生のみなさんの当事者研究は、今後の可能性を感じさせるとてもワクワクするものでした。自分や誰かの困りごとに対処できるためには、安全に困りごとを開示できる場が必要不可欠ですが、今回の研究の場はその役割を担っていたといえます。また一人ではなく社会的な文脈の中で研究を進めるなど、OECDのラーニング・コンパスでも提唱されている学びが多く実践されていました。こうした経験の広がりが、未来の学びを形づくっていくことでしょう。

Pick Up

公教育におけるインクルーシブ教育の推進

現状と課題

「学校はマジョリティ優位な環境になっている」

※教員の皆さんとの研修で出たご意見より

「インクルーシブ教育」は、ただ同じ教室で学ぶことだけがクローズアップされがちです。本当の意味でのインクルーシブ教育を実現するには、多様な子どもたちがいることを前提に施策を検討していく必要がありますが、当事者の想いや悩みを理解することが難しい、機会がないといったことが課題となっています。

取り組み

「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」（暗闇での対話）を通し、多様性を尊重し、それぞれに所属感がある学校の在り方を検討。

ダイアログ・イン・ザ・ダークでは、照度ゼロの暗闇空間で、聴覚や触覚など視覚以外の感覚を使ったコミュニケーションを体験します。暗闇のエキスパートであるアテンド（視覚障がい者）のサポートのもと、視覚を手放した中でのコミュニケーションを楽しみます。

暗闇の中に入ると、参加者は一瞬にしてその世界の弱者になります。アテンドのこまやかな見守りの中、仲間同士で安心できる関係性をつくり上げながら、助け合い、支え合って過ごします。今回は、暗闇を体験した後、グループディスカッションを行いました。

広島県教育委員会

県内の71人の指導主事等が参加

教育委員会においてダイアログ・イン・ザ・ダークを体験する研修は日本初。広島県の教育改革をさらに前に進めるために実施されることになりました。インクルーシブ教育の推進と、チームビルディングの目的で開催された本研修には、県内の指導主事等71人が参加。ディスカッションでは、どのグループでも白熱した議論が行われました。

暗闇の中で、「誰もが対等になる」ことを体験

暗闇の中での運動会を体験。ニックネームで呼び合うことで普段の肩書きから自由に。見えない不安はありますが、人の視線も気になりません。白杖（視覚障がいのある人が使用する白い杖）を使って暗闇で語り合い、行動します。

グループディスカッションで意見交換

ディスカッションを行い、個人の気づきをシェア。暗闇の中で起こった価値の転換について話し合います。暗闇に入る前と同じメンバーとは思えないほど打ち解けています。

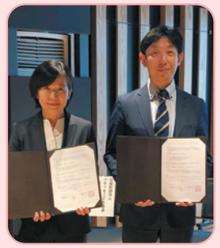
参加者の声（研修３か月後）

●学校訪問の際、多様な子どもがいることを前提とした授業や、子どもとの関わりを大切にした指導ができるよう指導助言をしています。
●児童生徒を見取る時に、一人一人の見え方や考え方が違うことや、その人の力を引き出すためには何ができるかを、今まで以上に考えるようになりました。
●不登校等児童生徒への支援に取り組むに当たって、個々の状況に応じるとはどういうことなのか、多様性とはどういうことなのかについて、より広い視点から考えるようになりました。

大阪府教育庁

インクルーシブ教育をさらに一歩前に進めるアウトプットも

大阪府下の市町村教育委員会に所属する指導主事を中心に、大阪府教育庁指導主事、府立学校管理職などを対象として、研修を行いました。大阪府下の公立学校の学級では、多様な子どもたちが同じ教室でともに学んでいます。ダイアログ・イン・ザ・ダーク体験後のディスカッションでは、インクルーシブ教育先進地域ならではの意見も多く聞かれました。



障がい理解の推進のため、大阪府教育庁と連携協定

大阪府教育庁と連携協定式
（左）大阪府教育庁市町村教育室桝田室長
（右）ペネッセこども基金事務局長青木

暗闇体験と、ディスカッション

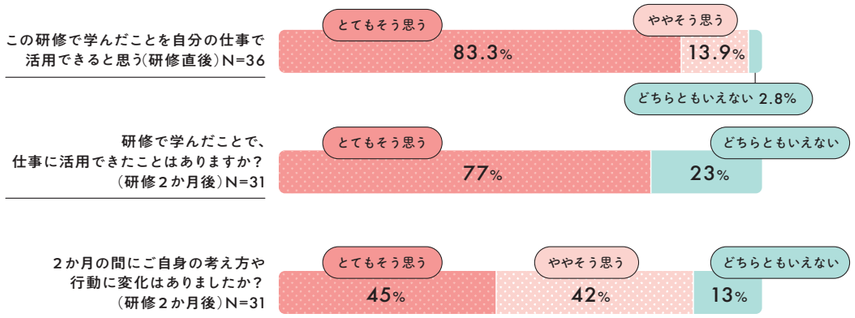
広島県同様に、暗闇の中での運動会を体験し、グループディスカッションで意見交換を行いました。

2か月後アンケートでもその効果は約8割で持続

研修後に記入したアンケートでは、研修効果について肯定的な評価をした人は、すべての項目において100%近くを占める結果となり、２か月後もその効果は約８割で持続していました。

参加者の声（研修２か月後）

●障がいはあるものではなく、社会との関係で生まれるものであると強く感じるようになりました。
●誰もが対等に関わり、みんなが平等である暗闇での体験は、視覚障がいの理解にとどまらず、差別や偏見の解消につながると思いました。
●「障がいの社会モデル」を理解したうえで、日常をどう変えていくかについて前向きに考えられる社会にしていけるようどんどん発信していきたいと思います。
●対話を通した意見交流を、研修会の中で取り入れました。



Check

くわしい実施レポートはこちらをご覧ください。

広島県　大阪府

病気・障がいを抱える子どもの学び支援

Pick Up

アバターを利用した学び支援モデルを広げる取り組み

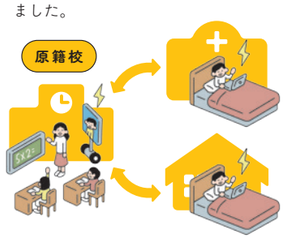
一般財団法人ニューメディア開発協会との協業

「アバターロボットを通じて学びを進め、病気や障がいを乗り越える力にしてほしい」「病気だからってあきらめることを終わりにしたい」。関係者や先生方の熱い想いと、保護者や子ども本人とのこまやかなコミュニケーションによって、病気や障がいを抱える子どもたちの学びを支援する事例が、ひとつひとつ積み上がっています。

沖縄県立森川特別支援学校の取り組み

授業が途切れないからよくわかる!

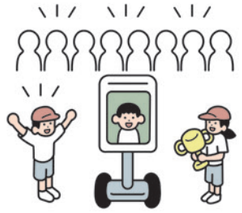
入退院を繰り返すと、院内学級と原籍校で進度がことなり授業内容が途切れます。アバターで原籍校に出席することで、授業も途切れず友達と一緒に過ごすこともできました。



大阪府立光陽支援学校の取り組み

「一緒」に過ごせるから力になる!

原籍校に働きかけ、アバターで体育祭にリアルタイム参加。久しぶりに友達と一緒に過ごし、友情の厚さを確認し合い感動。その後の治療に向かう力にもなりました。



東京都立多摩桜の丘学園の取り組み

「働く」イメージがつかめた!

アバターロボットを使い、就労の体験学習を実施。会話に合わせてうなずくなどの首振り機能で、現場にいるようなやりとりができました。ミュージアムで働く人の想いもわかった体験学習になりました。

茨城県立水戸特別支援学校の取り組み

すぐそばで見ているみたいにリアル!

デジタルで現実世界を再現するデジタルツイン。展覧会会場をデジタル上で再現することで、友達や自分の作品を自宅からリアルに鑑賞することができました。どこからでも参加することができるモデルになりました。

2024年度は ひとりでも多くの子どもが学びをあきらめなくていいように、取り組みをより多くの人に知ってもらい、導入校や支援者を増やし、誰もが使える環境を目指して活動していきます。

子どもの安心・安全を守る活動

教育プログラムを、学校などへ無償提供

子どもの安心・安全な環境づくりのための支援プログラムの無償提供を、財団設立当初から実施しています。ネット利用の低年齢化により、学校現場からのネットリテラシー教育へのニーズが高まっています。

防災 保育園・幼稚園向け

防災教育紙芝居
「じしんのときのおやくそく」

防犯 小学校 低学年向け

子どもの安全・安心
ハンドブックと
安全教室実施パッケージ

ネット 小学校 中・高学年向け

初めてのスマホ
安心ガイドブックと
安全教室実施パッケージ

シリーズ累計 のべ約125万部※

※2024年3月時点

2024年度は 学校現場以外も含め、より多くの方に活用いただけるよう、引き続き普及の拡大を目指します。

経済的困難を抱える子どもの学び支援

学びの質向上につながる教材の提供

経済的に困難な状況にある子どもの学習支援領域において、先進的な団体「認定特定非営利活動法人キッズドア」と連携して、「学ぶ意欲」と「言葉の力」の向上をねらいとした中学生向け教材を制作し無償配布。同じ課題を抱える全国の団体に活用いただきました。

KIDSDOOR 認定NPO キッズドア

連携

公益財団法人 ベネッセこども基金

支援者の育成にも役立ったとのお声も!

2024年度は より現場に近い場所で効果的に活用し、普及を図るための運用体制にしていきます。（2023年度、認定特定非営利活動法人キッズドアに事業を移管。教材は引き続きご利用いただけます。）